エコルーツ紀行

資源を生み生命を育む湿原

――炭鉱と湿原の釧路を行く

作家 柴崎友香

飛行機の窓から緩やかなカーブを描く海岸線が見えたと思ったら、あっという間に低い山並みと草原が連なる緑の大地が広がった。初めて見る北海道は、本州とは違う柔らかく繊細な緑色で美しかった。空港を出ると、猛暑日の続く大阪からは予想以上の涼しい風に包まれた。

ジャンボタクシーのベテラン女性運転手さんの滑らかな解説を聞き、牧場の牛や馬を眺めながら釧路市内へ。距離感がわからなくなるほどひたすらまっすぐな湿原道路を走る。右も左も、草原。と思っていると、運転手さんが「このあたりは全部湿原です。ヤチマナコという沼のような穴があって、昔は牛や馬がはまることもありました」。「ヤチマナコ」？「湿原」がどういう場所なのか、実感するのはもう少しあとのことになる。

19,357haと日本最大の広さを持つ釧路湿原。太古の海が現在の姿となったのは約3000年前。地殻運動により地盤は西高東低で、低くなった東側には海跡湖が残り、釧路川が大きく蛇行しながら流れている。圧倒的な平原の広がり、ほとんど手つかずで残された自然は、この湿原に流れてきた悠久の時を感じさせる。ここはまた多様な生物を育む場所でもあり、1980年日本で最初にラムサール条約登録湿地となった。

▲アイヌ語で「沼のところ」という意味を持つ塘路湖は、太古、海が後退する過程で誕生した海跡湖。レイクサイドとうろの土佐良範さんとカヌーに乗る

▲湧き水。雨や雪が数十年の時を経て湧き出て、塘路湖に注いでいる

塘路の湧き水

到着した場所は、塘路湖畔。ここからカヌーで、塘路湖を縦断する。案内してくださるのは、釧路国際ウェットランドセンターの斉藤さんとレイクサイドとうろの土佐さん。土佐さんは、代々この土地に住むアイヌの方で、塘路湖周辺の自然を守るために早くから尽力されてきた。カヌーが湖面に浮かぶと、土佐さんの舵取りですうっと進み出した。大きいトンボ、細いトンボが飛び交う中、静かな湖面に浮かぶ水草は菱。忍者が撒く菱の実だが、水草だとは知らなかった。栗のような味でおいしく、昔はアイヌの人たちの冬の間の貴重な保存食だった。秋の収穫の時期に合わせたお祭りも、「昔は神さまに収穫を伝える儀式だったのが、今はお祭りになっている」と土佐さん。菱は湖底から生え、根は三mもある。

見渡す限りの広い湖面をひたすら進むと、オジロワシの姿が。双眼鏡を覗いてみると、確かに白い羽根が目立つ。そして、大きい！

対岸の小さな浜辺に降りる。ここから水が湧いている

という。よく見ると、砂地には幾筋もの小さな水の流れがある。一か所ではなく、浜全体から水が浸みだしている。触ってみると、冷たい。湖の温度と全然違う。しかし、冬に湖が凍ってしまっても、逆に湧き水は凍らないというから不思議だ。昔はこのあたりに住んでいた人たちの貴重な水源だったし、今も動物たちが飲みにくるそうで、周囲にはシカの足跡があった。数十年前に降った雨や雪が、今目の前で湧き出ている。自然の複雑で精巧なしくみに感動する。

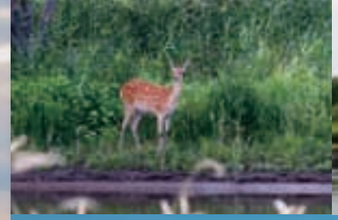
植物が分解されずに堆積した泥炭層

ゆっくりカヌーを漕いで戻りながら、土佐さんに、今年は異常に暑い日が続いている、湖の景色自体は変わらないけど周囲から泥が流れ込んで水深は一mほど浅くなった、など伺う。減っていく湿原を、土佐さんは未来に残したいという。

気温が低く農地にされずに残っていた湿原を調査し、一九八〇年にラムサール条約の指定にこぎつけたのは、地元住民を中心とした活動と努力だった。国立公園になったのはその七年後のことだ。釧路の自然は地元住民が主導して守ってきたのである。

斉藤さんの案内で、釧路川を上流へ。昔は水害の防止や農地開発のために川の流れを直線に変えてきたが、泥を運び込んで湿原が乾燥化してしまうので、元の蛇行した川に戻す事業が進められている。

細岡展望台から見た釧路湿原。蛇行する釧路川が見事な地上絵を描く



93年に釧路市でラムサール条約締約国会議が開かれたのを機に、地方の立場で湿地保全の国際協力を進めるための活動拠点として、釧路市はじめ関係市町村などにより95年「釧路国際ウェットランドセンター（KIWC）」が設立された。KIWC研究員の斉藤さゆりさんに案内してもらい、釧路川の蛇行復元現場を行く。

▲釧路川の蛇行復元現場にて

長靴に軍手で獣道を進む。棘のあるイラクサを掻き分けていく斉藤さんが頼もしい。周囲を見渡す余裕ができると、あまりに美しい風景に息を飲んだ。ミズナラやダケカンバなど落葉樹の薄い葉を通して差す光、背の高さほどに伸びたシダはまるで古代の森のようだ。釧路の短い夏の束の間の緑。冬には葉も草もすべて枯れてしまってどこまでも見通せる景色に一変するそうだ。足下の土はふわふわしている。湿原とは、植物が枯れても低温のため腐らずに長い年月をかけて堆積したスポンジ状の泥炭層から成る土地。豊かな養分を持ち、多様な生物の育つ場所となってきた。

すぐそばのせせらぎが、事業によって掘られた場所。少しずつ侵食が進み、弧の外側の崖が崩れてきている。落ちないように注意しながら、直線の川との合流地点へ。林を抜け、急に視界が開ける。深い青色の空が、川面に映って輝いていた。お盆が過ぎれば釧路の夏は終わる。空はもう秋の雲だった。

国内唯一・最後の坑内掘り炭鉱

翌朝は釧路コールマインへ。

石炭も炭鉱も過去の物というイメージを持っている人は多いが、発電や製鉄に石炭は不可欠であり、日本は現在でも世界一の石炭輸入国である。輸入に頼り切らず、また炭鉱の技術を失わないために、閉山した太平洋炭礦のあとを受け，二〇〇一年に設立されたのが釧路コール

▼泥炭から石炭へ、4500万年前の地層が美しい縞模様を見せていた。黒い部分が石炭だ

◀切羽（きりは）にて。巨大なドラムカッターが唸りを上げていた

釧路コールマイン。90年にわたる釧路の採炭の歴史に幕を下ろしてはならないと地元経済界が力を結集、太平洋炭礦から採炭事業を引き継ぎ、2001年に設立。採炭量や社員数は1/3に縮小したが、「掘り出せ、釧路の海底（そこ）ヂカラ」を合い言葉に、釧路市沖の海底の炭層で採炭を続ける、日本唯一の坑内掘り炭鉱だ。市原義久さんの先導で、採炭現場に入らせてもらった。

▶貯炭場ではブルドーザーが活躍。石炭が熱を持たないよう踏み固め、中の空気を抜いているのだとか

◀坑内に設けられた休憩所

▲坑内で使う資材を運搬する台車（トロッコ）

マインである。

一時は、海外の石炭に比べて三倍近い価格差があった国産の石炭だが、海外炭が値上がりする一方、コスト削減が進み、現在はその差は縮まっている。

今や国内唯一・最後の坑内掘りとなったこの炭鉱は、釧路市郊外の沖合二㎞以上にわたって海底下に広がっており、傾斜が緩いため大型の機械で掘削が可能だ。事前に綿密な地質調査をし、できるだけ近くて狭い範囲で効率のよい採掘をめざしている。また、今でも事故が多い中国やベトナムの研修生を受け入れて技術や安全の指導をしていて、この日もベトナムの研修生が出発前の安全確認の点呼を取っていた。

保安生産部長の市原さんの先導で、作業服に安全靴、ヘルメットにはヘッドライトの完全装備で人車に乗り込む。傾斜したトンネルを一気に降下する。「海岸線」の表示を越えさらに五分ほど下り、そこからは徒歩で現場へ向かう。海面下約二二〇m。冷たい風が吹いてくる。大抵の炭坑は掘り進むほど温度が上がるが、ここはなぜか昔から涼しいらしい。真冬は厳しい寒さになる。

鋼枠に支えられ多数のケーブルが這うトンネルをひたすら歩く。上り坂が続き、だんだんと坑道も狭く足場も悪くなるので、息が上がる。機械類はすべて安全対策のため鉄板で頑丈に覆われているため大きく、その分坑道は狭い。ヘッドライトの明かりだけを頼りにようやくたどり着いた掘削現場の先端は、想像を遙かに超える迫力だった。

四五〇〇万年の時を経て、植物から石炭へ

暗闇の中に、漆黒の岩盤が光っている。海底の地層の縞模様が、巨大な機械に削られて顕わになっていた。四五〇〇万年の時を経て、湿原に積み重なった泥炭層がこの地底で黒い石炭となる――説明を聞きながら、そういえば石炭は植物起源だったことを思い出した。太古の植物が泥炭となって湿原に堆積し、のちに大規模な石炭層になるのだと聞いたことがある。途方もない時間をかけて生み出された資源を、大勢の人が膨大な労力をかけて着実に掘り進んでいた。

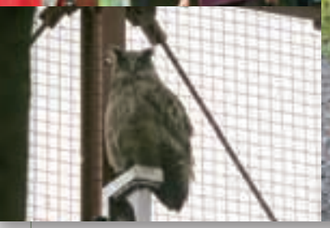
地上に戻り、釧路港の貯炭場へ。文字通り「山」のように石炭が積み上げられている。拾い上げてみると、艶があって軽い。案内してくれた釧路コールマインの水石さんによれば、時には化石化した植物の形が見られるそうだ。岸壁から船に積まれ、全国へ運ばれる。普段当たり前のように使っている電力や鉄の源となる石炭が生み出される場所を見ることができたのは、わたしの人生にとって忘れられない経験となるだろう。

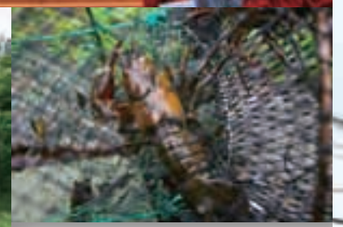
生物多様性の宝庫

環境省の釧路湿原自然保護官事務所へ。自然保護官（レンジャー）の竹中さんに釧路湿原の概要や世界各国で見直されている湿原の重要性を解説してもらう。生物多様

▶野外ゲージでリハビリ中のオジロワシ。事故の原因は感電、交通事故、鉛の銃弾が残ったシカ肉を食べたことによる鉛中毒などだとか

自然環境の保全整備や野生生物の保護管理を行う環境省 釧路湿原自然保護官事務所で、自然保護官（レンジャー）の竹中康進さんに湿原の話を聞く（写真右）。スポンジ状の泥炭層から成る釧路湿原では、シマフクロウやタンチョウなど鳥類約170種、キタキツネやエゾシカなど哺乳類30種、イトウなど魚類38種、氷河期からの生き残りのキタサンショウウオなど両生・は虫類9種、トンボなど昆虫約1130種など多彩な生態系を確認している。





◀▲外来種のウチダザリガニを捕獲。ニジマスの餌として北米から輸入し摩周湖に放流したものが増殖したそうで、前日にしかけた罠には驚くほどたくさんかかっていた。ヨーロッパでは高級食材らしい

性。その言葉どおり、湿原の生態系は驚くほどの多様性に満ちている。

事務所が置かれている野生生物保護センターでは傷ついた鳥たちの保護も行っている。普段はモニターでしか見ることができない鳥舎を見学させてもらう。翼を伸ばすと二mにもなるシマフクロウやオジロワシが合計十羽以上いる。獣医師が常駐し、傷ついた鳥の治療やリハビリを経て、可能なものは自然に帰す。

一方で湿原本来の生態系を維持するために、外来種であるウチダザリガニの増殖に歯止めをかけようと、罠をしかけて捕獲する。これも保護官たちの仕事だそう。

ミズナラの林を抜けて温根内ビジターセンターへ。豊かな大自然に見える森だが、ほとんどが一度伐採され放置されたところに自生した木々らしい。確かに大木は少ない。自然の状態に近づけるため、どのくらい人の手を入れるか試行錯誤しつつ、自然の状態に近づける事業も続いている。

指導員の若山さんに案内をお願いして、湿原を通る木道を歩く。一見すると草地だが、水を含んだ湿地を人は歩けない。そこで貴重な自然を観察するため木道を設置している。木道から両側を見ると、確かにヨシやスゲの根元には水が溜まっている。木道脇の水たまりのようなぽっかり空いたところに長い棒を差し込むと、二m以上すとんと入ってしまう。これが「ヤチマナコ」（谷地眼）で、非常に危険。

「黒いダイヤ」石炭が山のように積み上げられた貯炭場。「掘り出した石炭に、化石化した植物の形が見えることもある」と、水石豊さん

湿原内を歩いて、身近に生態を観察できる「温根内木道」。歩いていくと、クサフジやドクゼリなど小さな可憐な花が咲いている。釧路湿原の植物は約600種。どこを指してもすぐに毒の有無や名前の由来まで答えてくれる温根内ビジターセンターの若山公一さん（写真右下）のおかげで、釧路の植物を多く知ることができた。ヨシ・スゲ湿原を抜けると、大草原のようなミズゴケ湿原が広がる。

▲ヤチマナコ。湿原にある落とし穴のような池。水たまりのように見えて、実は2m以上。深いものでは4mもある

自然の恵みを享受して生きる

湿原にはより水分の多いヨシ・スゲ湿原と少し乾燥したミズゴケ湿原がある。木道の先でミズゴケ湿原に出た。植物の背丈が低くなり、三六〇度、見渡す限りの草原。頭上には空だけ。こんな広い場所を、ほかでは見たことがない。吹き抜ける風と鳥の声だけが聞こえ、街の細切れの時間ではない、永遠のように繰り返されてきた季節の営みを実感した。

●

釧路湿原と炭鉱は、何千年、何万年と積み重なってきた自然の恵みを享受して生きていることを実感できる場所だった。「この湿原も何千万年か後には貴重な石炭層になってるんじゃないかな」。竹中さんが笑う。四五〇〇万年とは言わないまでも、人は、せめて百年二百年、いや千年先の未来を考えて、目の前の自然に接しなければならないのではないか。そんな思いを抱いた。

柴崎　友香　しばさき　ともか

一九七三年大阪府生まれ。大阪府立大学総合科学部卒。機械メーカー勤務を経て作家に。二〇〇〇年のデビュー作『きょうのできごと』が二〇〇四年、行定勲監督によって映画化され、話題になる。〇七年『その街の今は』で芸術選奨文部科学大臣新人賞、織田作之助賞大賞、咲くやこの花賞受賞。他の著書『主題歌』『青空感傷ツアー』『ショートカット』など。街に、人々の記憶に刻まれていくさまざまな瞬間を、柔らかな大阪弁で描き、共感を集めている。

http://shiba-to.com/

撮影／山内厚美